

髪色が顔の形状知覚に及ぼす効果

丸見 友香

多くの人が「自分の見た目を良く見せる」という行為を日常的に行っており、人にとって見た目の良さは重要である。女性における魅力的な身体特徴の1つに「小顔」があり、それを実現する有効な手段としてヘアスタイルが挙げられる。本研究はヘアスタイルの中でも特に先行研究の少ない髪色に着目し、髪色が顔の形状知覚に及ぼす効果を検証することを目的として実験を行った。

本研究では、ショートヘア・ロングヘアの2種類の髪型の女性の刺激画像を用いた上下法によって、髪色による顔幅錯視効果を調べた。実験1では、黒髪・茶髪・金髪が顔の形状知覚に及ぼす効果を検証した。その結果、黒髪の顔幅が最も小さく知覚され、金髪の顔幅が最も大きく知覚された。これは、形や色・明るさに関して髪と顔でエコー錯視(森川, 2012)が起こり、色の性質(明度が高い色は膨張して見え、明度が低い色は収縮して見える)によって膨張・収縮して見えた頭部につられて、顔幅が変化して見えた、あるいは顔の色が髪色に近付き、顔自体が膨張・収縮して見えたためであると考えられる。または、色が顔の色相や明度に近づくにつれて髪と顔が同化し、髪が顔の延長として知覚(アモーダル補完)されたことで、黒髪から茶髪・金髪へと近づくにつれて顔幅が大きく知覚された可能性もある。

実験2では、色の膨張・収縮に強く働くとされる明度を統制した髪色(青髪・茶髪)を刺激画像に用い、その顔幅錯視効果を調べた。その結果、ショートヘアにおいては青髪の顔幅が小さく知覚されたが、ロングヘアにおいては茶髪・青髪の知覚された顔幅はほぼ同じであった。明度を同じにしたため色の膨張・収縮が働いたとは考えにくい。顔の輪郭に沿った茶髪のショートヘアでは髪と顔が同化しやすく、髪が顔の延長として知覚されたが、青髪のショートヘアでは髪と顔の同化が妨げられ髪と顔は別物として知覚されたため小顔に見えたと考えられる。なお、青いショートヘアと顔との間に大きさ対比錯視が生じた可能性もある。他方、ロングヘアでは髪の面積が非常に広いいため、そもそもアモーダル補完が大きく働きやすく、青髪でも小顔に見えなかったと考えられる。

本研究により、髪色が顔の形状知覚に効果を及ぼすことが実証された。また髪色による顔幅錯視は、同化や対比などの様々な錯視が複雑に絡み合って起こっていることが示唆された。しかし、顔の錯視以前に、幾何学図形における色の錯視に関しては未解明の点があり、現時点では髪色による錯視効果のメカニズムを完全に説明することは出来ない。したがって、その分野のさらなる研究が必要であろう。本研究における最大錯視量は1.3%程度であったが、身体の最大錯視量は5%前後になることが多いことを踏まえると、この錯視量は極めて小さいわけではないだろう。また、人の顔への感度が高いことも考慮すると、1.3%のというわずかな錯視量でも印象が変わる可能性は大いにあり、髪色で小顔に見せようとすることは有用であると言える。本研究は、2次元の正面向きの顔写真を用いた点や、2種類のみ髪型を用いて髪色による錯視効果を調べた点において、実生活とやや相違がある。3次元状態でも錯視は起こるのか、また他の髪型でも錯視は起こるのかといった様々な研究を進めることで、実生活に有用なものとなるであろう。

(基礎心理学)